

# 紀州家本源氏物語本文節記

—若菜上巻～幻巻—

成田大知

## 緒言

紀州家旧蔵伝阿仏尼等筆『源氏物語』、言わゆる紀州家本『源氏物語』は、鎌倉時代写の五十四帖揃本の『源氏物語』で紀州徳川家旧蔵の伝本を言う。昭和二年（一九二七）に紀州家よりイギリス籍インド人貿易商モディ (Naoraji Hornusji Mody 一八七三—一九四四) のもとに移ったが、彼の死後、昭和二十年（一九四五）の神戸大空襲で焼失したと推測されている。

紀州家本は、一般に知られている『源氏物語』の本文とは異なる、珍しい本文を持つ『源氏物語』として巷間に知られ

ており、当時の研究者たちによって次の書入校本が作られていた。

- ・「武田校本」—佐佐木信綱（一八七二—一九六三）主導のもと、武田祐吉（一八八六—一九五八）が紀州家本の原本を実見して、その本文を金子元臣〔本説源氏物語新解〕（全三冊、明治書院、一九二五—三〇）に書き入れたもの。
- ・「山岸校本」—山岸徳平（一八九三—一九八七）監督のもと、東京文理科大学生らが「武田校本」を何らかの活字本に写し取ったもの。
- ・「室伏校本」—室伏信助（一九三二—二〇二二）が「武田校本」の桐壺巻のみを、西尾光雄〔註源氏物語桐壺〕

(武蔵野書院、一九四一)に写し取ったもの。

紀州家本の本文は、芳賀博士記念会『校異源氏物語』(中央公論社、一九四二)、および池田亀鑑『源氏物語大成』(同社、一九五三―五七)に登載されていないため、右の三本が紀州家本研究上、重要な資料であったが、全巻の本文が書き入れられた「武田校本」と「山岸校本」は行方不明。そのため、紀州家本の本文は従来、「山岸校本」に拠って研究したと思われる、山岸周辺の人物の著書や論文に断片的に抄出されたものが知られるばかりであった。

しかし近年、第四の紀州家本の書入校本を新たに見出した。沼波守校註『註校日本文学大系 第七巻 源氏物語』下巻(誠文堂新光社、一九三七)を底本に用いていることから、仮にこれを「註校日本文学大系校本」と呼ぶ。そこに記される識語によれば、該本は、某氏(所有者、書入筆者とも詳細不明)が昭和十七年(一九四二)に「山岸校本」を写し取ったものとの由である。今は下巻(若菜上巻・夢浮橋巻)しか確認できていないが、もとは上巻(桐壺巻・藤裏葉巻)も存したものと考える。下巻のみとは言え、該本によって、謎多き紀州家本の三分の一の本文が明らかとなる。<sup>1)</sup>

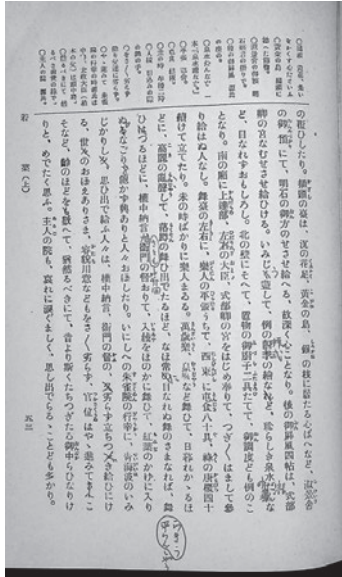
紀州家本の本文の性格については、山岸徳平『河内本源氏物語

語開題』(徳川黎明会、一九三五)に次のように記されている。

伝阿仏尼筆の本文は、総角巻・早蕨巻及び宿木巻の前半の如きに、河内本や湖月抄本と極めて大きな異同持つ外、略々松風巻以下は、相違の程度に多少の差はあるが、大体は湖月抄本に極めて親近な関係に立ち、一致するが如き部分を多く持つて居る。唯、帚木巻・榊巻を除けば、桐壺巻以下、明石巻・滯標巻の如き辺までは、多少顕著な相違を持つ本文である。

山岸は『湖月抄』の本文を「青表紙本としては、聊か不純であるとしても、大体青表紙系の本文」(同書)としている。とすれば、「総角・早蕨巻及び宿木巻の前半」を除く「湖月抄本に極めて親近な関係に立つ紀州家本の殆どの巻は「大体系青表紙系の本文」ということになる。

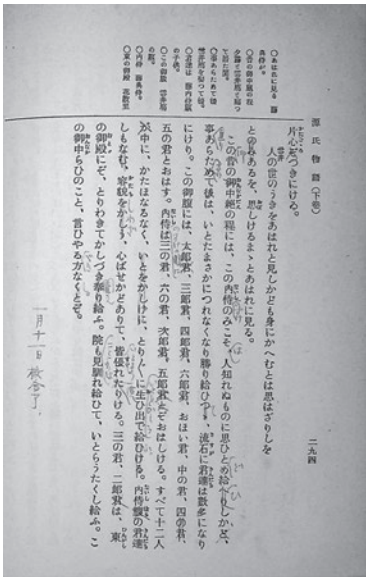
しかしながら、「註校日本文学大系校本」を縦覧するに、山岸が青表紙本とした巻についても程度の差こそあれ、異文を見出すことができる。それらの中には、「別本」(青表紙本、河内本のいずれにも属さない本文系統の伝本について池田亀鑑〔一八九六―一九五六〕が用いた便宜的呼称)とされる諸本と親近を示す箇所も多分にある。このことは、「系統の明ら



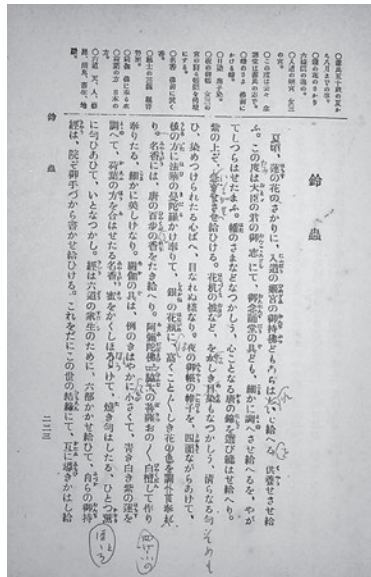
「校註日本文学大系校本」若菜上巻

かでない種々様々の孤立した伝本が、何の秩序もなく雑然と詰め込まれてゐる」(『源氏物語大成研究』第五章「別本の呼称とその性格」という「別本」においても、ある程度の系統を特立し得る蓋然性を示唆する。これによって「別本」の研究が進展し、正当な評価が下されれば、青表紙本、河内本の既成評価も自ずと変容して来よう。閉塞状態に陥っていると言つても過言ではない『源氏物語』本文研究に風穴を開けると期待される一本が、この紀州家本なのである。

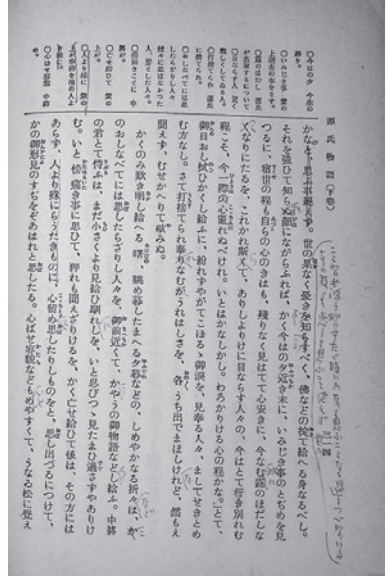
そこで、「校註日本文学大系校本」を用いて、まずは若菜上巻から幻巻までの紀州家本の本文の様相を示していきたい。



「校註日本文学大系校本」夕霧巻



「校註日本文学大系校本」鈴虫巻



『註日本文学大系校本』幻巻

【凡例】

- 一、紀州家本の引用には、「<sup>註校</sup>日本文学大系校本」を用いる。
- 一、「<sup>註校</sup>日本文学大系校本」からの引用については、次の1) 3)に従う。
- 1 該本から引用するに際し、書入の有様を厳密に伝えるべきであるが、煩を避けるため、『<sup>註校</sup>日本文学大系』の本文に書入を反映して復元した本文を掲出する。
- 2 「原文「…」」の注記がある箇所は、原文を反映して復元する。
- 3 該本の書入筆者が『<sup>註校</sup>日本文学大系』の本文に振られ

たルビに対して如何なる処置をとっているのか不明であるため、『<sup>註校</sup>日本文学大系』に振られたルビも残したまま引用する。

一、比較および引用は基本、『源氏物語大成校異篇』、『源氏物語別本集成』に拠る。但し影印、複製、翻刻の類が刊行されているものについては適宜それらに拠る。それらを列举すれば次の通りである。

- ・飯島本―池田和臣編・解説『飯島本源氏物語』（笠間書院、二〇〇八―〇九）
- ・御物本（各筆源氏）―日本古典文学会監修『御物各筆源氏』（貴重本刊行会、一九八六）
- ・国立歴史民俗博物館蔵帯木・手習巻―国立歴史民俗博物館蔵史料編集会『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書文庫 第十八巻』（臨川書店、二〇〇二）
- ・従一位麗子本―渡部榮『源氏物語従一位麗子本之研究』（大道社、一九三六）
- ・相愛大学春曙文庫蔵帯木巻・藤裏葉巻・橘姫巻・宿木巻・手習巻断簡―田中重太郎編『源氏物語断簡』（東風社、一九六四）
- ・天理図書館蔵伝藤原為家筆帯木巻、伝源頼政筆柏木巻、

- ・伝藤原俊成筆鈴虫巻・夕霧巻、伝西行筆竹河巻―『天理図書館善本叢書 源氏物語諸本集二』『同 二』(八木書店、一九七三・一九七八)
- ・中山本―国立歴史民俗博物館蔵史料編集会『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書文学篇 第十七巻』(臨川書店、二〇〇〇)
- ・伏見天皇本―吉田幸一編『源氏物語伏見天皇本影印』(古典文庫、一九九二―一九九五)
- ・尾州家本―秋山虔・池田利夫編『尾州家河内本源氏物語』(武蔵野書院、一九七七―七八)
- ・蓬左文庫蔵伝藤原為家筆竹河巻、伝源頼政筆総角巻、伝藤原為家筆浮舟巻―『日本古典文学影印叢刊十八 源氏物語古本集』(貴重本刊行会、一九七三)
- ・穂久邇文庫本―日本古典文学会編『日本古典文学影印叢刊一―七 源氏物語』(貴重本刊行会、一九七九―八〇)
- ・保坂本―伊井春樹編『保坂本源氏物語』(おうふう、一九九五―一九七)
- ・陽明文庫本―陽明文庫編『陽明叢書国書篇第十六輯 源氏物語』(思文閣出版、一九七九―八二)

なお「<sup>註</sup>日本文学大系校本」書人本文との比較の便宜を考慮し、紀州家本以外の本文については、引用に際して次の1)3)の処置を施す。

- 1 句読点と濁点を打ち、会話文には「」を施す。
- 2 検討対象外の部分については、適宜漢字を当てる。その場合、原文の表記はルビで示す。つまりルビを辿れば原文を復元できる。

3 原文において省略されている送り仮名と助詞を適宜「」で補う。

## 一 若菜上巻

若菜上巻は、青表紙本、河内本、「別本」間に大きな異同が無く、特徴的な異文は見られない。しかし、次に掲げる箇所に見える異文は、紀州家本の本文系統を考える上で参考となるであろう。

十一月、紫の上による嵯峨野御堂の薬師仏供養と精進落との場面。

二十六日を御としみの日にて、この院は、かく透間なく集ひ給へるうちに、我が御わたくしの殿とおぼす二條の

院にて、その御まうけはせさせ給ふ。(紀州家本)

現在確認できる殆どの本が「御としみの日」は「二十三日」とする。しかし、紀州家本においては「二十六日」とある。

紀州家本に同じくするのは、「別本」の保坂本と阿里莫本である。(但し阿里莫本は「二十六日をば」という本文であり、厳密に言えば、保坂本のみが紀州家本に一致する。)

これに続く箇所も参考となる。

いみじう盡して、例の様式の絵など、珍らしき泉水の壇いみじうなど、目なれずおもしろし。(中略) 南の廂かんだらめに上達部、左の大臣ひだりおとど、式部卿の宮をはじめ奉りて、つきくはまして

て参り給はぬ人なし。(紀州家本)

傍線部、諸本は次のような本文となっている。

めつらしきせんすい、たんなど (大島本)

めつらしきせんすい、たきなど(尾州家本・伏見天皇本)

めつらしき山水のさまなど (阿里莫本)

めつらしきせんすい、こたんなど (御物本)

めつらしきせんすい、のたんなど (保坂本)

めつらしき山水、たんなど (穂久邇文庫本)

この部分については、「ここは異文多く、解釈上問題のある所」との指摘がある(阿部秋生他校注・訳『新編日本古典文

学全集 源氏物語四』(小学館、一九九六) 九四頁頭注一二)。

紀州家本、保坂本、阿里莫本、穂久邇文庫本の本文は、「例の様式の絵など」「②れいの四き(しき)のゑ(え)など」と「珍らしき泉水の壇など」が「など」を伴って並列されており、それらについて、「目なれずおもしろし」という評を下すという文章になっている。ここでも紀州家本は保坂本と同じ本文となっている。

これに対して青表紙本、河内本、伏見天皇本の本文は、いつものありふれた四季の絵ではあるものの、珍しい山水、譚あるいは滝などは、という意に解すことができ、「めづらしきせんすい、たん(たき)など」は「れいの四季のゑ」に描かれた景物として捉えることができる。この場合、「めなれずおもしろし」という評は「めづらしきせんすい、たん(たき)など」について下されたものとなる。

紀州家本若菜上巻は、概ね青表紙本と言える本文である。

しかし、比較的諸本間の異同が激しい箇所においては「別本」の保坂本と親近を示している。この点において、紀州家本若菜上巻は「別本」と認められる。と同時に、保坂本との関係性を窺うこともできる。

## 二 若菜下巻

正月二十日過ぎのある月夜、光源氏が灯笼の光の中に女三宮の姿を見る箇所。

櫻の細長に、御髪は左右より零れ懸りて、柳の糸のさまし給へり。御琴の袋た、みてひきかへしたるに、程のちひさくおはしませば、なかなかさしやり給ふ程もなく、いと美しく見え給ふ。これこそは、限りなき人の御有様なめれと見ゆるに、  
(紀州家本)

この箇所、青表紙本では次の通りである。  
桜の細長に、御髪は左右よりこぼれかゝりて、柳の糸のさましたり。これこそは、限りなき人の御有様なめれと見ゆるに、  
(大島本)

青表紙本は紀州家本に見える傍線部の本文がまま無い形のものとなっている。

紀州家本と同じ傾向にあるのは、河内本や「別本」の阿里莫本、伏見天皇本、保坂本である。

桜の細長に、御髪は左右よりこぼれかゝりて、柳の糸のさましたり。御ことのふくろた、みてひきかへしたるに、

ほとんちひさくおはしませは、なか／＼さしやりたまふほとんちもなく、いとつくしうみえ給。これこそは、限りなき人の御有様なめれと見え給(ふ)に、(尾州家本)

桜の細長に、御髪は左右よりこぼれかゝりて、柳の糸のさまし給へり。御琴のふくろをた、みてひきかへしたるほとんち、ちひさくおはしませは、中々さしやり給ほとんちになく、いとつくしうみえ給。これこそは、限りなき人の御有様なめれと見ゆるに、  
(阿里莫本)

桜の細長に、御髪は左右よりこぼれかゝりて、柳の糸のさましたり。御箏のふくろた、みてひきかへしたるに、ほとんちひさくおはしませは、中々さしやり給程もなく、いとつくしうみえ給。これこそは、限りなき人の御有様なめれと見え給(ふ)に、  
(伏見天皇本)

桜の細長に、御髪は左右よりこぼれかゝりて、柳の糸のさましたり。御ことのふくろた、みてひきかへしたるに、ほとんちひさくおはしませは、中々さしやり給ほとんちもなく、いとつくしうみえ給。これこそは、限りなき人の御有様なめれと見ゆるに、  
(保坂本)

小異は存するが、傍線部の本文を有する点において、河内本、阿里莫本、伏見天皇本、保坂本とも紀州家本と同じ傾向の本

あり

文となつてゐる。

右で類似が認められた四本の中でも、紀州家本は保坂本に一致する場合が少なくない。

例えば、六条院における女楽からの帰途、夕霧が妻雲居雁について語る箇所。

わが北の方は、(中略)何事も唯おいらかに、打ちおほどきたる人のにくからずざれたる様して、子どもあつかひを、暇なくつぎ／＼し給へば、をかしき所もなく覺ゆ。

(紀州家本)

傍線部に該当する異文は、保坂本のみに見ることができぬ。

我〔が〕北の方は、(中略)何事も唯おいらかに、打ちおほどきたる人のにくからずされたる様して、こともあつかひを、暇なくつぎ／＼し給へば、をかしき所もなく思す。

(保坂本)

または、女三の宮に仕える按察の君に懸想する源中将の行動を書く箇所。

主要伝本の殆どにおいて、

近く侍ふ按察の君も、時々かよふ源中将、せめてよひいたさせければ、下りたるまに、たゞこの侍従ばかり近くは侍ふなりけり。

(大島本)

とあるが、傍線部について紀州家本と保坂本のみが同じ本文となつてゐる。<sup>(3)</sup>

近う侍ふ按察の君も、時々かよふ源中将にもひひに、下りたるまに、この侍従ばかり、さぶらふなりけり。

(紀州家本)

近く侍ふ按察の君も、時々かよふ源中将にもひひに、下りたるまに、たゞこの侍従ばかり、近くはさぶらふなりけり。

(保坂本)

そして次に掲げる、六条御息所の死霊に憑りつかれ、死に瀕していた紫の上が小康を得て、今までは気にも留めなかつた景物に快さを感じる箇所も、紀州家本と保坂本とは同じ本文となつてゐる。

年頃住み給はで、少し荒れたりつる院のうち、①廣々として狭げにさへ見ゆ。昨日今日かくもの覺え給ふひまにて、心ごとにつくろはれたる遣水前裁の、②心地よげなるを見出し給ひても、あはれに今まで經にけるを思はず。

(紀州家本)

年頃住み給はで、少し荒れたりつる院のうち、①ひろ／＼として狭げにさへ見ゆ。昨日今日かくもの覺え給ふひまにて、心ごとにつくろはれたる遣水前裁の、

〔ふ〕ひまにて、

②心地よけなるを見出し給〔ひ〕ても、あはれに今まで  
経おほにけるを思おもす。  
(保坂本)

①は青表紙本、河内本とも「たとしへなく」。他には、阿  
里莫本「たとしへなくきらく」として、伏見天皇本「たと  
しへなくとして」という異文を見ることができ、いづれ  
も青表紙本や河内本と同類のものである。

また、②については、管見に入る諸本が揃って「うちつけ  
に心地よげなる」という本文となっているが、紀州家本と保  
坂本は「うちつけに」を欠く。

上巻がそうであったように、下巻においても保坂本と共通  
する本文を多く見出すことができる。保坂本若菜上下巻が  
「別本」と認められているならば、それに共通する異文を多  
く有する紀州家本若菜上下巻も「別本」と認めるべきであろ  
う。また、保坂本と共通する本文が多くあるということは、  
保坂本との関係性の深さも示唆している。

### 三 柏木巻

柏木巻の本文系統は一般にその巻末で判断される。

青表紙本は、小異はあるものの、

秋つかたになれば、このきみ、はひるざりなど。

(大島本)

のように、「このきみ」すなわち薫が這うようになったこと  
が余韻を残す感じで記されて終わる。

これに対して河内本は、

この君、はひるざりなどし給ふさまのいふよしもなう、

おかしけなれば、人めのみにもあらず、まことにいとかな  
しとおもひきこえ給て、つねにいたきもてあそひきこえ  
給。  
(尾州家本)

のように、薫の描写に加えて、薫を可愛がる光源氏の様子が  
描かれる。

この異同を以て青表紙本か河内本か判断が下されるが、  
「別本」とされる諸本も二つの系統に大別される。

青表紙本系、

はひいさりなどし給。

(国冬本)

この君はひみさりなどし給。

(阿里莫本・麦生本)

この君はるさりなど。

(伏見天皇本)

河内本系、

この君はるいざりなどしたまふさまのいふよしもなし、  
をかしげなれば、人めのみにもあらず、まことにいとかな

なしとおもひきこえ給ひて、つねにいたきもてあそひきこえ給ふ。  
 (御物本)

この君ははひいざりなどし給さまのいふよしなく、をかしけなれば、人めのみにもあらず、まことにかなしとおもひきこえ給。つねにいたきもてあそひきこえ給。

(穂久邇文庫本)

この君ははひるざりなどし給さまのいふよしなく、をかしけなれば、人めのみにもあらず、まことにかなしとおもひきこえ給ふ。つねにいたきもてあそひきこえ給ふ。

(保坂本)

このきみははひあざりなどしたまふさまのいふよしなく、おかしけなれば、ひとめのみにもあらず、まことかなしとおもひきこえたまひて、つねにいたきもてあそひきこえたまふ。  
 (天理図書館蔵伝源頼政筆本)

紀州家本はこの箇所、青表紙本に近い本文となっている。

秋つかたになれば、この君這ひあざりなど。(紀州家本)

この部分だけを見れば、紀州家本は青表紙本と同系統とすることができようが、次に示す箇所などは、青表紙本と袂を分かつ本文となっている。

今はの際にある柏木が、自身の北の方である女二の宮(落

葉の宮)のことを心配する箇所。

青表紙本は次のようにある。

「なかなかこの宮は、行く先さき後ごろ安やすく、まめやかなる後見うしろみまうけ給へり」と宣のたまはすと聞き給き「ひ」しを、かたじけなう思おもいつ。「かくてみすてたてまつりぬるなめり」と思おもにつけては、さま／＼にいとほしけれど、心よりほかなる命いのちなれば、耐たへぬ契ちぎりうらめしうて、思おもし嘆なげかれんが心苦こころしきこと。御心みこころざしありてとぶらひ物せさせ給へ」と母上はは、うへにも聞きこえ給たま「ふ」。  
 (大島本)

ここで柏木は、自身との結婚に難色を示していた宮の母(一条御息所)とは対照的に、宮の父朱雀院は好意的であったことが畏れ多いことであつたと述懐する。そして実の母に、先立つ自分に成り代わつて宮のことを頼む、と語り掛ける。

青表紙本はじめとして、殆どの伝本が右のような本文であるが、紀州家本は傍線部の辺りがやや異なる本文となっている。

「なか／＼この宮は、行く先うしろ後ご安やすく、まめやかなる後見うしろみまうけたまへり。」と、宣のたまはすと聞き給きひしを、かたじけなう思おもひ出でづべきなめりと思おもふにつけては、様々さまざまにとほしけれど、心こころより外なる命いのちなれば、堪たへぬ契ちぎりの怨うらみ

めしくて、くちをしう思し歎かむが心苦しき。「御志あ  
りて、とぶらひ物せさせ給へ。」母上にも聞え給ひて、

(紀州家本)

青表紙本が朱雀院への謝辞と、女二の宮への口惜しさの言葉  
とを分けて書いているのに対して、紀州家本では、その二つ  
の要素が結合したような本文となっている。

保坂本も、紀州家本に似た本文となっている。

(中略) かたじけなくたてまつりつへきなめりと思につ  
けては、「さま／＼にいとほしく、心よりほかなる命な  
れば、たえぬる契りをうらめしと思し嘆かむが心苦しき。  
御心寄せありて、とぶらひものせさせ給」と母上にも聞  
こえ給ひて、

(保坂本)

殆どの伝本が青表紙本のような本文である中で、この紀州家  
本と保坂本の文章構造の類似は、二本の関係性を考察する上  
で一つの方法となろう。

なお初めに掲げた巻末箇所については、紀州家本は青表紙  
本系の本文、保坂本は河内本系の本文となっている。しかし、  
系統が異なると思われる二本がかく類似する本文を有してい  
るとすれば、柏木巻の本文系統をめぐる判断基準については、  
その巻末の異同に重きを置くことは差し控えた方がよいかも

しれない。

なお柏木巻には、現在確認できる諸本には見えない異文も  
存する。

光源氏が女三の宮を冷遇していると仄聞した朱雀院は、山  
を下りて六条院を訪う。そこで朱雀院が源氏にかけた言葉。

「世の中を顧みすまじく思ひ侍りしかど、猶惑ひ醒めが  
たきものは、この道の闇になむ侍りければ、行ひも懈怠  
して、若し後れ先だつ道の闇になむ道理のま、ならで別  
れなば、やがてこの恨みもや形見に残らむと、あぢきな  
さに、この世の譏りをば知らで、かくものし侍る。」と  
聞え給ふ。

(紀州家本)

産後、心身ともに衰弱する女三の宮について、朱雀院は、逆  
縁にも父である自分に先立つことがあったならば、と憂慮す  
る。その言葉の中に見える傍線部の「闇になむ」は、他本に  
見ることができない。恐らくこれは、「道の」と写す写し手  
の脳裏に、すぐ前に写した破線部の文言が思い起こされ、勢  
い「闇になむ」と書き付けてしまったものであると思われる。  
柏木巻は「別本」とされる伝本が比較的多く、それらの本  
文は概ね河内本に一致する。書写年代の古い「別本」が河内  
本に近い本文であるならば、すなわち柏木巻については、河

内本は校訂本でありながら、古い本文を留めている蓋然性があることを意味する。「別本」とされる諸本の関係性を精査した上で、河内本との比較検討が望まれる。

#### 四 横笛巻

横笛巻も「別本」と認められる本文である。

例えば冒頭近く、女三の宮が反古にした朱雀院への手紙を目にした光源氏の言。

「いと世をおひらかにおぼしなりにける比かと、うしろめたなげなる御気色なるに、このあらぬ所もとめたまへる、いと聞いたて心憂し。」と聞え給ふ。(紀州家本)

青表紙本、河内本とも傍線部の言が無い本文となっているが、「別本」と思われる穂久邇文庫本と保坂本は紀州家本に類似する本文となっている。

世を

「いと、いかにおほしなりにけるにかと、後めたげなる御気色を、このあらぬ所もとめ給へる、いと聞いたて心憂し」と聞こえ給ふ。(穂久邇文庫本)

「いと、世をいかにおほすなりにけるにかと、うしろめ

たげなる御気色を、このあらぬ所もとめ給へる、いとわたて心憂し」と聞こえ給(「ふ」)。(保坂本)

異同はあるものの概ね一致することから、これら三本に関係性があることは明らかであろう。

しかし、紀州家本横笛巻には、穂久邇文庫本、保坂本に親近を見せる本文よりも、独自性の際立つ本文が散見される。

巻末近く、六条院で源氏が薫を眺めつつ述懐する箇所。

三の宮の若君は、宮たちの御列にはあるまじきぞかしと、御心の中に思せど、なか／＼その心ばへを、母宮の、御心の鬼にや思ひよせたまはむと、これも心の癖にいとほしう思さるれば、いとらうたきものに思ひ傳き聞え給ふを、人の思へるさまざまことわりの御有様なれば、心ことに思ひ聞えたり。(紀州家本)

「三の宮の若君」、すなわち女三の宮と柏木との不義密通によって生まれた薫への対応をめぐって逡巡する源氏。柏木の子である以上、他の宮たちと一緒にすべきではないと考えるが、薫と他の宮たちとを区別したならば、女三の宮が不快に思うであろうから、薫を他の宮たち同様、大切に育てることにしたと書く箇所。諸本いずれも「給ふ」と結ぶが、紀州家本は「を」で接続し、最後に傍線部の本文を付け加える。

和歌にも紀州家本独自の本文を見ることができると。

一条御息所の詠。

露しげきむぐらの宿にいにしへの秋にかはらぬ蟲ぞこゑ  
す | (紀州家本)

結句について、「註校日本文学大系校本」は、底本文の「蟲のこゑかな」の「の」と「かな」を消し、それらの右傍に「の」と「かな」、左傍に「ぞ」と「する」を記す。底本の本文と同様の本文が書入れられている理由は判然としないが、紀州家本原本においては、「蟲ぞこゑする」という本文も併記されていたのであろう。

また、次の柏木の詠。

笛竹にふきよる風のことならば末の世ながきねにもつた  
へよ | (紀州家本)

諸本、結句を「ねにつたへなむ」に作るが、紀州家本では「ねにもつたへよ」に作る。「なむ」は相手に対する願望を表わすので、「つたへよ」と意味するところは同じである。

横笛巻は異文が少なく、判断材料に乏しいが、このように青表紙本や河内本とは異なる本文が少なからず散見される点において、横笛巻も「別本」と認めて差し支えなからう。

## 五 鈴虫巻

鈴虫巻も冒頭部分の僅かな異文から、「別本」と考えられる。

紫の上ぞ、①いそがせ給ひける。花机はなつくえの被おほなど、をなじ  
き染そめもなつかしう、清らなる匂ひ、染めつけられたる心  
ばへ、目なれぬ様なり。(中略)阿彌陀佛、②四協しけいの菩  
薩ぼさつおのく白檀びやくたんして作り奉りたる、細こまかに美しげなり。

(紀州家本)

まず①の部分には諸本、「いそぎせさせ」とあり、紀州家本と同文の本は他に見出せない。

②の「四協しけいの菩薩ぼさつ」については、青表紙本、河内本の殆どが「けうしのほさち(4)」とあるのに対して、「別本」は異なる本文を示している。中でも中山本、徳久邇文庫本、保坂本、陽明文庫本は紀州家本と同じく「四けふのほさつ」となっている。これらの例から、鈴虫巻も「別本」とあると考える。

しかし巻末については、紀州家本は青表紙本と同文であり、右の箇所類似が認められた中山本、徳久邇文庫本、保坂本の他、河内本、言経本とは異なつた形となっている。

いと心深く、世〔の〕中を思しとれるさまになりま  
り給ふ。六条の院も、ろこ、ろにいそきたまひて、御は  
かうなどおこなはせたまふとぞ。  
(尾州家本)

いと心深く、世〔の〕中を思しとれるさまになりま  
り給〔ふ〕。六條院ももろ心にいそき給て御八講などお  
こなはせたまふ。  
(言経本)

いと心深く、世の中を思しとれるさまになりま  
り給〔ふ〕。六条院も、ろこ、ろにいそき給て、御はかうなど  
をこなはせ給とぞ。  
(中山本)

いと心深く、世〔の〕中を思しとれるさまにのみ、な  
りまさり給〔ふ〕。六条の院も、ろ心にいそき給て、御  
八かうなどおこなはせ給とぞ。  
(穂久邇文庫本)

いと心深く、世の中を思しとれるさまにのみ、なりま  
さり給〔ふ〕。六条の院も、ろこ、ろにいそき給て、御  
はかうなどをこなせ給とぞ。  
(保坂本)

紀州家本をはじめ、青表紙本と「別本」の阿里莫本、麦生本、  
陽明文庫本は傍線部の本文を欠く。「別本」とされる伝本の  
中でも、本文が分かれる箇所であると言えよう。

なお紀州家本鈴虫巻には、往時の書写という行為の在り方  
を思はせる異文に接することもできる。

観月の宴における冷泉帝の御製。

雲の上もかけはなれたるすみかにも物わすれせぬ秋の夜  
の月……  
(紀州家本)

諸本、傍線部を「雲の上を」に作り、「雲の上も」に作る本  
は紀州家本の他に見出せない。「を」と「も」は字形も類似  
しない。では、かかる異文はどのようにして生まれたのか。

このことを考える上で思い起こされるのが、桐壺巻、野分  
の段における桐壺帝の御製である。

雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらむ浅茅生の宿  
(青表紙本)

該歌にも「雲の上も」「秋の月」という語句が見える。「雲  
の上も」という紀州家本の異文は、この類似した語句から成  
る該歌に誘引されて成ったものではないかと思われる。と言  
うのも、二首とも御製であり、桐壺巻、鈴虫巻とも時季は秋  
であり、また、右に掲げた冷泉帝御製の前には、「花鳥の色  
にも音にも思ひわかまへ」という、桐壺巻の「花鳥の色」に  
音にもよそふべきかたぞなき」に似た記述があるなど、桐壺  
巻を思い起こされる要素が揃っているからである。鈴虫巻の  
写し手が『源氏物語』の愛読者であったならば、「花鳥の  
……」という文言を写すときに桐壺巻との類似を感じ、その

本文が脳裏に浮かんだことであろう。その桐壺巻の記憶が揺曳したまま冷泉帝の御製に筆が及べば、「雲の上を」と写すのに勢い桐壺帝の御製のように、「雲の上も」と書き付けてしまうことがあつたであろう。かかる写し手の機制については、紀州家本宿木巻の異文を例に、拙稿「読書の行為として『書写』—紀州家旧藏伝阿仏尼等筆源氏物語からの考察—」〔『成城国文学』四一（二〇二五・三）〕において考察したことがある。同稿で「書写において、筆が差し掛かった箇所状況が類似する物語の文言が、次々と写し手の脳中に甦るとすれば、書写は読書にも等しい様相を呈する行為であつた、と言ふことができよう」と述べたが、鈴虫巻のこの異文についても、かかる書写の様相を窺うことができるものと考えられる。鈴虫巻は、これまでの巻とは異なり、特定のある伝本に親近を見せるという傾向にはない。しかし、青表紙本よりも「別本」とされる本と共通する点が多いことから、「別本」であることは間違いないであろう。

## 六 夕霧巻

夕霧巻は、河内本あるいは「別本」とすべき様相を示して

いる。

例えば、病に伏す一条御息所のもとを訪うた際の夕霧の言。渡らせ給ひし御送りにもと思ひ給へしを、六條の院に承りさしたる事侍りし程にてなむ。日頃もそこはかとなくまき紛る、ことども侍りと、思ひ給ふる程よりは、こよなうおろかに御覧ごらんぜらる、こそいと口惜侍れ。」など聞え給ふ。  
（紀州家本）

青表紙本は傍線部、「事のくるしう侍る」。紀州家本に概ね一致するのは、河内本と「別本」諸本である。ただし、「こそ」を「事」とする（平瀬本）、「いと」を欠く（阿里莫本・御物本・保坂本・麦生本・陽明文庫本）などの小異はある。完全に紀州家本に合致するのは、「別本」の国冬本のみである。

国冬本のみが紀州家本に類似する箇所は他にもある。

右の直後に見える、落葉宮の衣擦れの音の描写。

いと柔かに打ちみじろきたまふ御衣おんぞのほとなど、さばかりななりと聞き居給へり。  
（紀州家本）

傍線部について、殆どの伝本が「なとし給御そのをとなし」（青表紙本）に大同小異の類似した本文となっており、管見の限り、紀州家本に類似した本文となっているのは国冬本の

みである。

いと柔らかに打ちみじろき給御そのほとなんと、さばかりな、りと聞き給へり。  
(国冬本)

また、この後の夕霧の言。

「この律師に必ず言ふべき事のあるを、護身などに暇なげなめる、たゞ今はうち休むらむ。こよひこのわたりにとまりて、そやのしはてん程に、かのゐたるかたにものせむ。  
(大島本)

傍線部について、青表紙本をはじめとした多くの伝本が、

こよひこのわたりにとまりて、そやのしはてんほとに、かのゐたるかたにものせむ。  
(尾州家本)

こよひこのわたりにとまりて、初夜の時はてむほとに、かのゐたるかたにものせむ。  
(伏見天皇本)

こよひこのわたりにとまりて、しよやの時はてむほとに、かの居したる方にものせん。  
(穂久邇文庫本)

こよひこのわたりにとまりて、しよやの時はてむほとに、かの居したる方にものせん。  
(保坂本)

こよひこのわたりにとまりてそ、後夜の時はてん程に、かのりやうしたるかたにものせむ。  
(陽明文庫本)

というように、「初夜(しよや、そや)」あるいは「後夜」と

いう語を含んだ一文となっているのに対して、紀州家本と国冬本は、これらとは異なった本文となっている。

今宵このわたりにしのみやかに、これから侍はせよ。

(紀州家本)

こよひこのわたりにしのみやかに、これかれさぶらはせよ。  
(国冬本)

「初夜(しよや、そや)」または「後夜」の語が見えないことはもちろん、「こよひこのわたり」以下、大きく本文が異なる。このように国冬本との類似が指摘できることから、夕霧巻については、国冬本との関係性を検討していくべきであろう。

諸本間で異同の多い巻末部分についても記しておく。

夕霧巻の末尾には、夕霧の子女について、雲居雁と藤典侍、二人の間に何人の子供を儲けたかが記されている。この部分、一般には次のような本文で知られている。

さすがに公達は、数多になりにけり。この御はらには、太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、なかの君、四の君、五の君とおはす。内しは、大きみ、三の君、六の君、二郎君、四郎君とおはしける。  
(大島本)

しかし、傍線部に記される「この御はら」(雲居雁)と「内



君」「六の君」に誘引されたものか。

・雲居雁の子…太郎君、三郎君、四郎君、六郎君、大君、中の君、四の君、五の君（計八人）

・藤典侍の子…三の君、六の君、二郎君、五郎君（計四人）

### 3 阿里莫本・麦生本

\*合計人数が十一人と、他本とは異なる設定となっている。

・雲居雁の子…太郎、三郎、四郎、六郎、大君、中の君、四君、五君（計八人）

・藤典侍の子…五郎、三君、六君（計三人）

### 4 その他

・国冬本においては「二郎」が見えず、「四郎」が雲居雁の子と藤典侍の子とに重出する。おそらくこれは、藤典侍の子の「二郎」を「四郎」と書き誤ったためであろうと推測される。

・穂久邇文庫本は概ね2に該当するが、「六の君」が記されていない。子供の合計人数を十二人と記していることから、3のように設定が異なるという訳ではなく、単なる写し落しと思われる。

紀州家本はこれらのうち2に該当する。特段珍しい本文ではないが、紀州家本が、河内本や国冬本以外の「別本」とも繋がりがあることがわかる<sup>⑥</sup>。

夕霧巻は比較的大部の巻であるので、これら僅かな例を以てその本文系統を断定するのは軽々であるが、とりあえず青表紙本とは異なる本文であることをおさえておきたい。

## 七 御法巻

紀州家本御法巻は次に掲げる箇所などによって、「別本」と認めることができよう。

死に瀕する紫の上の落飾を叶えさせてあげようとする光源氏の描写。

「〔中略〕僧誰か留とまりたる。」など①申し給ふ御氣色、②せめて心強くと思おぼしなほすべかめれど、御顔おんかほの色もあらぬ様にいみじう、堪へぬ、御涙のとまらぬを、理ことわりに悲しう見奉り給ふ。「御物怪おんものけなどの、③例も人の御心みこころ亂らむとてかうのみし侍はるめるを、然さもやおはしますらむ。

（紀州家本）

青表紙本や河内本では次のようになっている。

〔中略〕僧誰か留まりたる」など①の給御気色、②心つよく思しなすべかめれど、御顔の色もあらぬさまにいみじく、堪へかね、御涙のとまらぬを、理に悲しく見奉り給〔ふ〕。「御物怪などの、③これも人の御心乱らんとて、かくのみ物は侍めるを、然もやおはしますらん。

(大島本)

〔中略〕僧誰か留まりたる」など①のたまふ御気色、②心つよく思しなすべかめれど、御顔の色もあらぬさまにいみじく、堪へかね、御涙のとまらぬを、理に悲しく見奉り給〔ふ〕。「御物怪などの、③これも人の御心乱らんとて、かくの事も侍るを、然もやおはしますらん。

(尾州家本)

他本を見るに、伏見天皇本と穂久邇文庫本は青表紙本に、飯島本は河内本と同様の本文となっている。

しかし、「別本」においては傍線部に異同が見られる。

〔中略〕僧誰か留まりたる」など①申給御気色、②せめて心つよく思しなすべかめれど、御顔の色もあらぬさまにいみじく、堪へかね、御涙のとまらぬを、理に悲しく見奉り給〔ふ〕。「御物怪などの、③れいも人の御心乱らんとて、かくのみ物し侍めるを、然もやおはします

らんとて、

(阿里莫本・麦生本)

〔中略〕僧誰か留まりたる」など①申給。②せめて心つよくと思しなすべかめれど、たえぬ御涙とゞめがたきを、理にいみじう見奉り給〔ふ〕。「御物の怪などの、人の心を乱るとて、かく申〔す〕も侍〔る〕なるを、③然もやおはしますらん。

(保坂本)

〔中略〕僧誰か留まりたる」など①申給御気色、②せめて心つよく思しなすべかめれど、御顔の色もあらぬさまにいみじく、たえぬ御涙のとまらぬを、理に悲しく見奉り給〔ふ〕。「御物怪などの、これも人の心乱らんとて、かくのみ物し侍るを、③然もやおはしますらん。

(陽明文庫本)

①「の給」に対して「申給」、②「心つよく」に対して「せめて心つよく」という異同が存する。また③で紀州家本に見える「例も」という異文は、阿里莫本と麦生本に見ることができる。

紀州家本が阿里莫本、麦生本に一致する箇所は他にもある。二条院での法華経供養を終え帰途につく花散里に紫の上が贈った歌。

絶えぬべきみのりながらぞ頼まる、世々にとむすぶ長き

ちぎりを

(紀州家本)

巻名「御法」の由来となった紫の上の歌。結句「長きちぎりを」は青表紙本、河内本、「別本」の殆どが「中のちぎりを」に作る。紀州家本の「長きちぎりを」に同じくするのは、麦生本と阿里莫本のみである。

この部分、仮名に直せば、「なかのちぎりを」と「なかきちぎりを」。「の」と「き」の異同である。字母が明らかでないのでこれはあくまで推測の域を出ないが、恐らくここは「能」と「起」の誤写による異同であると思われる。運筆は違うが、字形が似ているので誤ることは多分にあり得ると思われる。

最後にもう一例、紀州家本御法巻が「別本」諸本と近い関係にあることを示す異文を紹介する。

巻末、紫の上の死を悼む人々の様子を書く箇所。

青表紙本、河内本とも、

中宮なども思し忘るゝときの間無く、こひきこえたまふ。

(大島本)

中宮なども思し忘るゝときの間無く、こひきこえ給。

(尾州家本)

傍線部を以て巻を終えるが、紀州家本は少しく異なる。

中宮なども、おほし忘るゝ時の間もなく、日數になべて

恋ひ聞え給ふ。

(紀州家本)

「日數になべて」という文言が付け加わった形となっている。これと同じ傾向にあるのは、先ほども紀州家本との類似を指摘した、阿里莫本、麦生本の他、保坂本、陽明文庫本である。

中宮なども思し忘るゝときの間無くあけ暮の日かすにそへてこひ聞え給。

(阿里莫本・麦生本)

中宮なども思し忘るゝ折無く、日かすにそえてこひきこえ給事、いみしくたくなんそこの御中らひに、みなおもひいてきこえたまひける。

(保坂本)

中宮なども思し忘るゝときの間無く、ひかすにそへてこひきこえ給。

(陽明文庫本)

紀州家本は、これらの中では、陽明文庫本に一番近似した本文と言えようか。特定の伝本に酷似する本文という訳ではないが、以上の例から、紀州家本御法巻も「別本」と認めて問題なからう。紀州家本は、数少ない御法巻の「別本」として、貴重な本文資料であると言いうことができる。

## 八 幻卷

幻卷は、紫の上の死を悼み過ごす光源氏の一年を書く。

源氏が我が身の上を「この世につけては、飽かず思ふべきことおさくあるまじう、高き身には生まれながら、又人より異に、口惜しき契〔り〕にもありけるかな」と、顧みした後、世のはかなくうきをしらすへく、仏などの掟て給へる身なるべし。

(大島本)

という本文が、青表紙本と河内本、そして伏見天皇本、穂久邇文庫本は続くが、傍線部について、「別本」とされる伝本は異なる本文となっている。

世のことはりもひろくしらす、たゝときにあたりておもふ事なく過しつへかりける年月のほとよりもかなしとおもふことたえず、世のはかなくうきことをおもひしるへく、仏などの掟て給へる身なるべし。

(阿里莫本・麦生本)

よのことはりもふかくしらす、たゝ時にあたりて思ふことなくてすこしつへかりしほとよりかなしとおもふ事たえず、はかなくうちきくことを思しるへく、仏などの掟

て給へる身なるべし。

(飯島本)

世のことはりもしりたまえず、たゝときにありておもふことなくすくしつへかりし年月のほとよりかなしとおもふ事たえず、世のはかなくうきことを思しるへくて、仏などの掟て給〔ふ〕なるべし。

(御物本)

よのことはりもふかくしらす、たゝときにあたりておもふ事なくすくしつへかりしとのほとよりかなしとおもふことたえず、よのはかなくうき事をおもひしるへく、仏などの掟て給へる身なるべし。

(保坂本)

よのことはりもふかくしらす、ときにあたりてをもふ事なくすくしつへかりけるとしのほとよりかなしとおもふことたえず、世のはかなくうき世しらるへく、仏などの掟て給へる身なるべし。

(陽明文庫本)

細かな異同は存するものの、「別本」と考えられる伝本は概ね共通した本文となっている。

紀州家本も小異はあるものの、これらと殆ど同一の本文となっている。

世のことも深う知らず、たゝ時にあたりて思ふことなく過しつべかりける年の程より悲しと思ふこと絶えず、世の果なく憂きよし知るべく、佛などの掟て給へる身

るべし。

(紀州家本)

この他にも、紀州家本が「別本」のみに見える異文を有している箇所がある。

生前、紫の上が植えた四季折々の花について記す箇所。

ほかの花は一重散りて八重咲く花桜盛り過ぎて、樺桜は開け、藤は遅れて色づきなどこそはすめるを、その遅く疾き花のこゝろをよくわきて、色々を尽くし植多置き給

〔ひ〕しかば、

(大島本)

河内本、伏見天皇本、穂久邇文庫本もこれに殆ど同じくするが、傍線部について「別本」の多くは、

心をよくとりわきておもしろくみ所あらせんとて、

(阿里莫本・麦生本)

心をしりつ、おもしろう見ところあらせんと、(飯島本)

心をしりておもしろく見ところあらせんと、(御物本)

こゝろをしりつ、をもしろうみところあらせんと、

(保坂本)

という本文となっている。

紀州家本もこの部分、

心を能く知りつ、おもしろく見所ありて、

とあり、飯島本や保坂本に類似した本文となっている。これ

らによれば、紀州家本幻巻も「別本」と考えて差し支えないであろう。

「別本」の幻巻としては、近年、飯沼山圓福寺に蔵される伝西行筆一帖が、佐々木孝浩氏によつて新たに紹介された

〔飯沼山圓福寺蔵 源氏物語「まほろし」帖―解題・影印・

翻刻―〕、『斯道文庫論集』五三(二〇一九・二)。佐々木氏

によれば、圓福寺本は、天理図書館蔵伝源頼政筆柏木巻の僚

巻であり、その本文は保坂本に近似したものであると云う。

先の異文二例についても表記の違いこそあれ、圓福寺本は保坂本と同文である。

保坂本との類似が指摘される圓福寺本であるが、紀州家本に一致する箇所もある。

花散里への源氏の返歌。

さ衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいと、

悲しき

(紀州家本)

初句「さ衣の」について、青表紙本、河内本、「別本」の殆どが「羽衣の」に作る。佐々木氏は「保坂本とも一致しない数字の独自異文」としてこの箇所を取りあげ、「和歌表現的にも「空蟬」に対応するのは「羽衣」であるので、ここは円福寺本の誤写とみて良いように思われるのである」とする

(前掲論文)が、紀州家本と東京大学本も「さ衣」に作り、言経本も「さ」を見せ消ちにして「は」とあることから、これは単なる「円福寺本の誤写」ではないものと考ええる。「和歌表現的にも「空蟬」に対応するのは「羽衣」であるならば、ここは「は(波)」と「さ(佐)」の字形の類似に起因した誤謬であろう。紀州家本、圓福寺本、東大本、言経本に共通する祖本においてかかる誤写が生じたものと推測される。

なお幻巻では、紀州家本独自の奇異な本文にも接する。

紫の上を失い悲嘆に昏れる源氏。夏、池のほとりを飛ぶ螢を見て、「長恨歌」の一節、「夕殿螢飛思悄然 孤燈挑尽未成睡」を誦じて詠唱する場面。

螢のいと多う飛び交ふも、「夕殿にはたるとんて」と、  
例の古言もかゝる筋にのみ口馴れ給へり。

夜を知る螢を見てもかなしきは時ぞともなき思ひなり  
けり (大島本)

傍線部、源氏が口ずさむ「長恨歌」の一節は、管見に入るすべての伝本において右の本文となっているが、紀州家本においては、

夕殿に螢ともして

となっている。「夕殿螢飛」と「孤燈尽挑」の混成のような

本文であり、文意も通らない。勿論、「長恨歌」の訓読にもこのような例はなく、紀州家本独自の異文である。恐らくここは、「夕殿に螢とんて」とあったが、「ん(无)」と「も(毛)」の類似によって誤写が生じて「夕殿に螢ともて」となり、「ともて」では意を解せないということ、と「ともして」に改められたものと考ええる。ただしこの改変が紀州家本におけるものか、紀州家本の元本におけるものかは判然としない。また、たとえ誤りと認識していても元本を忠実に写そうとしたのか、文意が不可解なものであっても特段気にしなかったのか、写し手の書写に対する態度についても気になるところである。

幻巻も「別本」と認められる一巻であり、保坂本や圓福寺本との類似を指摘できる。他の巻においてもその親近性を窺うことのできた保坂本との関係性の強さが幻巻においても確認できる。

#### 注

(一) 紀州家本の伝来、研究史、そして「註日本文学大系校本」の詳細については、拙稿「紀州家旧藏伝阿仏尼等筆源氏物語本文の新考察―新出「註日本文学大系校本」管見―」

〔国語国文〕九二―五、二〇二三・五〕参照。

- (2) 紀州家本と他本とを較べたとき、紀州家本の独自性が際立つのは「例の様式の絵など」とある部分である。「註日本文学大系校本」には特に注記が無いことから、紀州家本原本にも、表記こそ不明だが、「様式」という語があったとしか解せない。しかし、「様式」という語は『大漢和辞典』には掲載されておらず、『日本国語大辞典 第二版』を見てもその用例は、中村正直『西国立志編』を筆頭に近代のものばかりである。このことから、「様式」という語は近代に至って造られた語であると考えられる。とすれば、かかる語が鎌倉期写の紀州家本に見えるのは不可解である。「武田校本」「山岸校本」註『日本文学大系校本』、いずれかの書入筆者の誤謬であろうか。
- (3) 「源中将せめてよひいたさせければ」―阿里莫本「源中納言しのひて物いひに」。
- (4) 「ほさち」―池田本「ほさちを」、西下経一旧蔵本「ほさち」。
- (5) 御物本「なとし給御そのおとなと」、麦生本「なとし給御そのをとなひなと」、阿里莫本「なとし給御そのをとなひなと」。
- (6) 二〇〇八年、伊井春樹氏によってその存在が公にされた大澤本（宇治市源氏物語ミュージアム所蔵）もまた、夕霧の子の人数と内訳について珍しい本文となっている。すなわち同氏『大沢本源氏物語の伝来と本文の読みの世

界』（おうふう、二〇一六）に掲出される本文を見るに、雲居雁の子は、「太郎」「三郎」「四郎」「六らう」「中のきみ」「四の君」、藤典侍の子は「大君」「三君」「六のきみ」「二郎」「五らう」となっており、現在確認できる主要伝本のいずれにも合致しない内訳である。

(7) 「さ衣のうすきにかはる」―御物本「ぬきかふるうす、みころも」。

〔付記〕 本稿は、成城大学大学院文学研究科に二〇二四年度提出の博士論文「紀州家旧蔵伝阿仏尼等筆源氏物語の研究」の一部である。

（なりた・だいち 明治大学商学部兼任講師）